

『松井家譜』

康之豊後国速見郡同由布院所ノ知行所為受取出張ノ事

參ノ卷 四頁

一慶長五年初春家康公三斎様を被為召 御勝手向不如意ノ由被為及聞召候ニ付 乍少知豊後国

ニて六万石ノ明地有之候を 大坂御屋敷ノ御臺所料ニ被進候ニ付 彼地為受取松井康之可被

差越被仰付候 依之同年二月廿一日康之儀丹後久美ノ居城を發足仕候 此節被差添候面々ハ

有吉四郎右衛門立行并魚住市正昌永等九人 康之自分ノ侍二十一騎雜兵二百餘人ニて播州室

津より乗船仕 三月二日木付ノ城下下之庄エ着仕翌三日城を受取申候 其年田畑檢地年貢等

相濟次第康之ハ久美エ帰城仕 四郎右衛門ハ木付御城代相勤候様ニと被仰付候故 當分康之

ハ本丸エ罷在四郎右衛門ハ三ノ丸ノ屋敷エ居住仕 所在ノ頭立候者を召集御法度ノ趣等申聞

御城を相守居候處 三斎大坂より丹後エ被成御帰国 四月朔日宮津御発駕同十五日木付エ御

下着御領内被遊御巡見候 其頃黒田如水軒ハ豊前中津エ御在城ニ付 速見郡御巡見ノ節佐田

ノ刃ニて可被成御対面御約束ニて同廿四日御出會被成 翌廿五日杵築城エ被遊御帰候 然處

上杉中納言景勝脚謀叛ニ付家康公急度可被成御退治旨ニて 三斎様エも御先手を被仰付候ニ

付 大坂より長岡玄蕃頭殿・米田助右衛門連判を以て其段申上候飛札 同廿八日杵築工着仕候 此節康之儀ハ直ニ御供仕罷上申筈ニ御座候處思召ノ旨被成御座 先杵築工在城仕候様ニ被仰付 為名代松井新太郎興長を丹後より可被召連旨被仰渡 翌廿九日杵築御出船 五月五日大坂エ御着津六月上旬丹後エ被遊御帰国候上 同廿三日先為御陣代與一郎様御出陣松井興長御供仕候 三齋様ハ同廿七日御出陣 御留守ニハ幽齋様御軍令廿七ヶ条并ニ武者押ノ次第七番迄被成御定 六月十六日與一郎様エ被進別紙五ヶ条御書付も被成御添候 右同日御同文ニて康之父子エも右ニ通ノ御書付被成下候

豊後杵築立石合戦之事

參ノ卷 百十四頁

一慶長五年九月八日 大友左兵衛督殿〔吉統〕豊後国安岐ノ内大島ト申所ニ着船 安岐城主熊谷内藏允直陳ハ大坂方ニて留守居熊谷久藏工面談有之 曰杵〔丹生嶋〕城主太田飛驒守一吉・美作守一成父子エハ以使者被牒合 其晚出船杵築ノ沖を渡高崎〔淺見〕エ船を繋 同九日速見郡立石ノ要害ニ被楯籠候〔大友左近將監能直當国初封ノ時 立石ニ被入候吉例於任今度立石ニ被楯籠候由〕

然處 大友家ノ老臣吉弘加兵衛統幸ハ 彼家御改易以後筑後柳川ノ城主立花飛驒入道立斎ノ扶助を受居候處 旧主右ノ大義を被企候共 大坂方勝利有之間敷と存 大畠ニて義統工謁見仕 黒田如水軒被申合関東ノ御味方可被致処 今度毛利家ト合躰被仰合候儀御分別違ニて御座候 既ニ御嫡子ハ関東ニ御成御座候ニ付 旁御了簡有之候様ニと諫言仕候得共 義統一円同心無之ニ付切腹可仕ト決定仕 安岐ノ城ニ居申候熊谷久藏ハ兼テ好ミ有之候ニ付 右ノ趣語申候得ハ 夫程存切此所ニテむざむざと犬死せんよりハ 是より三里先木付ノ城ニ丹後ノ松井樞籠候ニ付 彼所エ參致討死仕間敷哉ト申ニ付 尤ト同意仕夫より雜具を焼捨必死ト定一味仕候古傍輩旧臣等と共に大内山・木田臺・若宮馬場ノ通エ人数を繰申候 此様子青木三郎右衛門ト申浪人其頃杵築工罷下居 松井康之ノ懇意を請居候故 三郎右衛門城内エ馳參 今日未ノ刻大友勢杵築エ抑寄候旨告知せ候ニ付 早速斥候を出候處 敵軍ハや四郎嶽と申所エ屯仕候由相達候 折節黒田如水軒ハ同月九日中津御出軍ニテ高森工御着陣可有御軍談旨杵築エ申參候ニ付 有吉四郎右衛門立行ハ彼地エ罷越有合不申候 康之櫓工上り見候へハ 敵早や小人数ニテ城下を罷通申候ニ付 康之申候ハ敵少人数ニテ白昼城下を無氣遣躰ニテ通り候ハ必定 當国ハ大友数代ノ領知ニて候間 町人百姓等工内通仕 城兵を偽引出し 跡ニて城を燒立可申候歟又ハ伏兵を設置候か 何ノ道ニも城兵を可引出トノ手立ニ

テ可有之ト察シ 夫々手配仕自身大手ノ門エ罷在士卒を制し一人も出シ不申候 青木三郎右衛門も味方ニ加可申由康之エ願ひ 直ニ籠城仕候故人質ノ番を任せ 康之家来下津半左衛門・木付右馬允等と一所ニ差置申候〔木付右馬允ハ大友ノ家来ニて 其後ハ此節康之被受扶助罷在候〕

吉弘加兵衛ハ森末と申所迄押来候節 桑原才藏御郡方ノ御用ニ付罷出居 此由承付城内エ使を以 大友ノ人数小勢ニて森末エ罷在候 彼等を討取可然哉又ハ無事ニ差通申候半哉と申越候 康之承ケ様ノ事を使を以申越候段沙汰ノ限不届二候 自身參可申由申聞使を追返候二付才藏馳歸申候を直ニ城内エ留置申候 吉弘一手ノ者共ハ森末ノ庄屋中村惣左衛門宅ニて弁當を仕緩々と休息仕居候得共 康之弥構不申候ニ付 彼所罷立上八坂を過杵築日出ノ堺辻ノ堂と申所ニて〔此所より日出エハ二十町程有之候〕 日を暮し夕糧をしたため 夫より引返杵築城を可攻取手配仕候

康之も下津半左衛門等エ申付人質を相守せ候處 百姓共申談 半左衛門ニ酒を飲せ候て不意ニ組伏刺殺可申と手筈仕置 半左衛門參候時如約束大勢集り酒を勸候へハ 何心なく數盃飲申候へ共 強勢ニ恐れ一人も近寄得不申候由 後日野原太郎左衛門以下野心ノ者共誅罰仕候節白状仕候

一九月十日ノ夜 吉弘加兵衛統幸杵築城へ夜討可仕と 岐部山城左近入道玄達〔琢〕・吉良傳

左衛門・江藤又右衛門・上野弥平・吉弘七左衛門〔鉄砲頭〕・柴田小六・小田原又左衛門・

大神堅助・富木兵内〔鉄砲頭〕・一萬田民部・平林津之助此外ニ新參ノ侍十人雜兵合百餘人

〔本行ノ人数ハ太平ノ後大神堅助 康之エ物語仕候〕馬場ノ尾白水迄押来

柴田小六・平林津之助を初十四五騎為案内者生池通干瀉を傳ひ 朝日寺ノ下安住寺大松ノ陰

川ニ添切所を越 城内〔百姓丸〕ノ人質を守せ置候都甲兵部丞ニ内通仕置 及夜半相圖ノ火

を出候を見合城近く押寄 岸木町より焼立下町大手際迄焼込申候 此間ニ兵部丞を初人質を

捨吉弘勢ニ馳加り候者共有之候 野原太郎左衛門も敵方ニ内通仕候得共 木付右馬允無二ノ

忠節を存候故内応相叶不申候〔此儀後ニ露見仕礙ニ申付候〕 其夜ハ少雨降火も鎮り殊更暗

く漸及曉申候頃 康之家来中川下野・井口六兵衛・下津半左衛門・坂本三郎右衛門・杉崎作

左衛門・今井惣兵衛以上六人ニ百姓丸ニ在合候ニ付 先中川下野敵を見懸鑑を携出候處 上

野長助と名乗長刀ニて渡合 下野を一打ニ溝ニ切倒し下野を組伏首を取候半と仕候處 下野

中間甚六と申者長助頭を後より切申候ニ付長助起上り候 甚六刀切レ不申候ニ付 長助最前

持候長刀を奪取無隙相戦申候内 小姓少九郎〔高麗人〕と申者馳參候故下野を除候様ニと少

九郎エ申 長刀を捨左右ノ手をひろげ長助ニ摯懸り候處 長助引退候ニ付猶追懸取付候得共

振放し逃去申候 此節長助三ヶ所手負甚六も五ヶ所ニ疵を蒙申候 少九郎ニ言葉を懸申候時
甚六ハ左ノ額ニ被切付彼是五ヶ所蒙疵候得共 少九郎・甚六兩人ニて下野を介抱仕引取申候
下野儀ハ長助ニ被押付首を搔れんと仕候時 其刀を握候故手ノ内をきられ申候 右上野長助
と相戦候内 柴田小六助候半と仕候を井口六兵衛取合せ互ニ名乗鎧を合申候 小六ハ左ノ脇
を突れなから身を捻り刀を抜きまニ六兵衛ニ打懸候處 間遠く足ノ甲ニ切付疵を蒙(一ニ小
六は左ノ脇を突れながら身を捻り六兵衛を突申候へハ 槍先下り足ノ大指を突割 其鎧七ツ
毛より足ノ甲迄當り疵を蒙と御座候候) 双方共ニ手負申候ニ付相引ニ仕候 柴田小六ハ甲
を抜^{ヨメス}仕傍を見廻居候所 三ノ丸より放候鉄砲にて額より後エ被打通即死仕候
大手観音堂ノ下百姓共逃散候跡ノ焼屋敷エ敵二十人斗集居候ニ付 下津半左衛門・坂本三郎
右衛門・杉崎作左衛門家来一兩人宛召連 今井惣兵衛も一同ニ敵を目懸參候處 人顔幽ニし
て火繩ノ光見へ候ニ付 惣兵衛・半左衛門エ言葉通ハし あの花ハ人と見候間一矢可仕と弓
ニ小雁股を打番^{つが}ひ射申候處 鎧ノ胸板ノ捻返しを削喉ニ射込 廿七八歳ノ若武者一矢ニ果申
候(此射申候^{やじり} 今ニ子孫伝来候) 此競ニ右三人ノ者共二十斗ノ敵ニ懸申候 其時大神堅
助と下津半左衛門名乗合鎧を合 半左衛門ハ左ノ脇を突せ堅助ハ胸ニ疵を蒙双方引分申候
江藤又右衛門と名乗候敵ニハ坂本三郎右衛門鎧を合 杉崎作左衛門も鎧を合申候 其内ニ惣

兵衛ハ射留候首を取申候 其外ハ康之下知仕城内ノ者壹人も出し不申候 城外ニ在合候者共
迄右ノ通相働 竟ニ寄手おわりを町上ノ高ミニ追上候處を 有吉四郎右衛門ハ大筒を發し 康之ず
かさす下知仕魚住市正組ノ御鉄砲 康之自身ノ鉄砲を以打立申候得ハ 手負共ノ首を我と取
候て敗軍仕立石表迄引取申候 其内夜も明方ニ成候ニ付追々使を遣城外ノ者共打入せ 今井
惣兵衛射留候首康之実檢仕候處 有故者ゆえあるものと見候ニ付吟味仕候得ハ木付右馬允ハ豊饒彈正にて
可有之と申候得ハ 清田主計鎮乗入道寿閑見申し候て 平林伴之助と申功ノ者にて大友家エ
罷在 常々運ハ天ニ有と申運之天右衛門と名乗此頃ハ府内ニ罷在候處 只今運盡唯一矢ニ逐
討死候と申聞落涙仕候〔寿閑ハ大友家ノ士にて則清田石見父にて御座候 此頃ハ康之扶助を
受罷在候〕

一〔九月十日〕黒田如水軒は〔慶長〕垣見和泉守家純居城富来とみくを被攻圍候内 松井康之より飛
札を以 大友義統昨九日申下刻速見郡濱脇ト申所エ着船有之 直ニ立石村ノ要害ニ被居本陣
候〔濱脇より立石迄一里〕

依之兼テ被仰合置候通 急ニ御人数を被出大友方ニ勢付不申内御退治被成候様ニと申遣候處
兼て其御覚悟にて一番備久野次右衛門・曾我部五右衛門・母里與三兵衛・時枝平太夫千餘人
二番備井上九郎右衛門・野村市右衛門・後藤太郎助〔又兵衛子〕千餘人都合式千餘 国東郡

ノ内森・小田原両所ニ陣を張せ 富来へハ不被召連被残置候 十日ノ朝重て杵築より飛脚を以夜討ノ次第注進仕候 富来迄ハ七里程にて御座候得共 敵地ノ事ニ付廻道を仕 難所を凌漸十一日ノ曉七時分富来エ着仕候ニ付 森・小田原エ被残置候久野・曾我部・母里・時枝・井上・野田ノ軍勢 急ニ杵築表エ馳向佐渡守エ申談 如水軒杵築エ御出候を相待候様ニと被仰遣候 使ノ者十二日辰ノ上刻森ニ着仕候由にて候 同日申ノ下刻ニ右之人数杵築エ着仕候 如水軒八十一日夜寅刻より巻解し杵築エ御出陣ノ處 安岐・背戸田両所ノ戦ニ隙取申候 此儀杵築エは不相知候ニ付 康之ハ如兼約如水軒を相待出軍可仕と申居候得共 時枝平太夫申候ハ 我々三頭遣し被置候上ハ松井殿次第にてハ候得共 敵を眼前ニ見付 殊更杵築エ取懸慮外仕候 大友を如水軒手ニかけ候でハ口惜存候 先大友を討果し立石にて待可申候ニ付 康之色々異見仕候得共承引不仕 如水軒ノ先勢ハ弥十三日寅刻打出へきニ一決仕候ニ付 康之も同前ニ出軍仕候 依之如水軒エ康之より家来志水五郎助を為使者差遣 御出を待可申と御家来各々エ色々申入候得共無許容被打出候ニ付 最前より被仰合候事を徒ニ相成申候得共御人数ノ案内仕候旨申進候

一同十三日 寅刻ニ如水軒ノ先勢杵築城を押し候 松井康之儀は杵築城内ノ手配を定 同卯刻出軍仕候 康之杵築御加増地為請取罷下候節ハ 騎馬二十一人召連候得共 右ノ内七騎を

松井新太郎興長おきながエ分遣関東エ出陣仕 残十四騎ノ内松井新助〔沼田上野介光長子〕・松井與三〔本氏井上紀伊嫡子〕・村尾勘兵衛・藤村平兵衛・中川下野・井口六兵衛・中川伊豫・本嶋備後八騎并・中川兵助〔下野嫡子〕・田中理右衛門・堀口三太郎・〔加藤次左衛門〕・〔堀口三四郎〕等は杵築城エ差遣 志水五郎助は如水軒エ使ニ遣し居合おあひあひまうす不申 平位助太夫・下津半左衛門・坂本三郎右衛門・杉崎作左衛門・松井加兵衛外ニ中川五兵衛〔伊豫嫡子〕・本嶋貴兵衛〔備後嫡子〕・近藤弥十郎を加以上八騎并尾崎伊右衛門・中澤藤五郎・中山六右衛門・生〔徳〕田甚三郎・〔近藤弥十郎〕前野九郎兵衛・入江久次・上原長三郎・田中清三・山田半右衛門・後藤與三右衛門・堀九郎右衛門・渋谷和泉父子・朽木勘右衛門・今井惣兵衛・中山三右衛門・井佐弥右衛門・大島仁助・遠藤九兵衛・田原助左衛門・茶道ノ梅圓等召連申候 有吉四郎右衛門以下ノ御侍九騎以上十六騎ニテ御座候 如水軒ノ先勢と杵築城押出し候儀一時よノ前後御座候上 甚た難所ニテ殊ニ長夜ニ里程隔り申候ニ付 康之頻ニ急道馬を進メ候得共手綱を取あおり申候ても果敢行不申 一騎打ニ歩せ申候 時枝平太夫・井上九郎右衛門等も難所ニテ諸勢統不申候ニ付 かんのを〔かんなわ〕山と申野山ノ傍かたわらニ下居申候時 康之初杵築勢追申候て一所おちたに下立 康之 井上九郎右衛門・野村市右衛門兩人エ申候ハ 昨日杵築中津ノ御旗本を待受候半と申儀も不被用 又杵築よりは

迄ハ越中守領分ニ付 我等先を可致と申事も不被用 杵築城を被押出理を非ニなされ候へ共
無是非候 此方ハ身ニ請たる敵ニて候間 是より立石エハ一里ノ内外ニ付 是より先を可仕
候間左様被心得候様ニ申候へハ 井上・野村申候ハ我々兩人ハ今日ハ跡勢ニて候間 先手ノ
時枝ニ被申候様ニと申ニ付 此所ニて下々エ兵糧を仕はせ候 則康之ハ時枝平太夫エ是より
ハ我等先を仕ト申候へハ 如水ノ先手として杵築より是まで七里御先を仕 今少ニ成跡備ニ
罷成候事思も不寄由返答仕候ニ付 康之立腹仕候様子を井上・野田見請候て 双方ノ所存無
余儀存候 只松井殿と時枝と馬を被並 先後なしニ御人数を被進候得と仲介を入申候ニ付
双方任其旨馬を進申候 康之此所ニて下々ニ兵糧を仕ハせ候
扱時枝手ノ先勢ハ実相寺山ノ二ノ間ノ谷道ニ折向ひ申候處 今日大友方ノ先手竹田津志摩人
道一ト 此様を見候て狼烟を揚候へハ 大友氏ノ本陣立石村も狼烟を合申候 康之も馬を進
先桑原才蔵并家来坂本三郎右衛門エ道を見候様ニと申聞候ニ付〔桑原才蔵ハ在方ノ御役相勤
居申候ニ付 本文ノ通御座候〕 兩人ハ道筋ニ不構鶴見村ノ中ニ入候へハ 乞食一人居申候
ニ付道を問候處 いか程ノ御人数ニても此道宜敷候ト申村 一町半村はつれ迄案内仕委敷ク
教申候〔立石合戦相濟 此者吟味仕候得共行衛相知不申候〕 三郎右衛門馳帰此道を案内仕
実相寺山エ打上申候

時枝ハ山間ノ道を過廣野ニ一組ノ人数を北向ニ備を立申候 大友義統ハ本陣を被打出 時枝

〔味方ノ〕備を弓手ニ見なし東向ニ備を立暫野中ニ折敷 杵築勢実相寺山エ打上候を被見物

候 康之儀ハ実相寺山より大友ノ陣を見わたし候處 石垣原ハ南下リニ壱里ノ野中と申候得

共長く相見ヘ 横ハ実相寺山立石ノ間二十町も可有之候 此野ハ草短く繩を張たることく豎

横十文字ニ荊棘生シ 土地ノ高下有之石高ノ地にて足場悪敷御座候 中津方ノ後陣今少押詰

候て合戦を初可申と双方ノ位を見合居候内 大友方より足輕を出し鉄炮を少々打懸申候得ハ

早や時枝方より乗出し手初め可有之躰ニ付 杵築勢も無是非時枝ニ負申間敷ト足輕を懸敵味

方相懸ニ迫合始申候

此節下津半左衛門ハ夜討ノ鎗疵いまた平癒不仕候ニ付 杵築エ可残置旨申渡候得共 達て断

申候ニ付 今口昇を預たとひ千萬ノ働仕候共 昇を離候ハハ切腹可申付旨申渡 人数を打下

し候得ハ半左衛門野中ノ躰を見 昇を山より下し候ニ付 待候様両度使を以て申付候處 先

ノ躰不被成御覽候哉 はや取詰鎗際ニ成申候 昇を是ニ待候へとハ不被心得と申候 康之此

旨承届近藤弥十郎エ申付 昇を下し候ハハ半左衛門を討捨候へと申渡候 此由半左衛門エ申

聞候ヘハ不及是非又々元ノ通ニ打上昇を立申候

其内ニ先手ハ次第ニ詰寄敵あひ一町ノ内外ニ相成候 此躰を坂本三郎右衛門見候て只今先手

ハ鎗を可仕候 是ニ御陣は如何と申候ニ付 康之時分を見合馬を乗出し 有吉四郎右衛門・魚住市正等も三郎右衛門申所尤ト申直ニ釐エ討下し申候 康之馬を早め先手ノ鉄炮際ニ馬を乗付候へハ 四郎右衛門は馬より下鉄砲を取申候 此時敵合三十間斗ニ押詰 康之下り立候を見候て宗像掃部・吉弘加兵衛等ノ敵百人斗り鉄砲を越して進出突懸候へハ 四郎右衛門鉄砲を以て十四五間程ノ間ニて放し敵を打倒申候 康之見事なるぞ今一ツと申候内後ニ廻り鎗を取申候 康之も長き鎗遣候へと申候得共 こま若ト申者持候直鎗參付不申候ニ付 仁若ト申者鍵鎗を差出候を取振直し候時 左ノ方ニて魚住右衛門兵衛・康之家来中川五兵衛兩人鎗を合申候 康之を見懸ケ敵二十人斗鎗〔薙刀〕太刀ニて打テ懸り候を鍵鎗を以て相手ニ罷成敵を追散し首ニ討取 左ノ手ニ蒙疵申候 右ノ脇鎗近藤弥十郎 左ノ脇鎗は坂本三郎右衛門其脇松井加兵衛 其脇有吉四郎右衛門 其脇桑原才藏 其脇四郎右衛門家来八坂又助 其外宮津ノ面々并家来田中清三・平位助太夫・前野九兵衛・上原長三郎・杉崎作左衛門・今井惣兵衛・茶道ノ梅圓等四郎右衛門家来岸助之丞・葛西彦四郎何れも力戦仕敵を追立 大友方取軍仕候 此時康之先手ノ鉄炮□挺〔笹丸紋付〕大友方ニ被奪取申候〔此鉄炮于今於当家エ伝来仕候〕を康之家来共口惜存敗軍ニ紛れ敵方ニ附入相働 茶道ノ梅圓は先ニ進敵六人を相手ニ仕討仕候 遂ニ義統ノ被為持朽葉柄弦ノ指物を分捕仕候〔此指物其後代々當松井求馬エ相

用 當時ニテハ遣置申候]

時枝備ハ最前より先を争ひ軽々敷相進候得共 鎗際ニ成却て敵ノ鉄砲ニ被打立進兼申候内

康之初鎗を合敵を突崩候ニ氣生候哉 敗敵を追懸申候處立石際ニて返し稠敷鉄砲を(被)打

懸申候得ハ 母里與三兵衛・時枝平太夫此勢辟易仕其儘引返し申候 康之是を見受候て時枝

エ家来尾崎伊右衛門を使ニ遣し ケ程迄勝軍仕ながら敵も追ぬニ敗軍する事如何成儀ニて候

哉 大友を討取か本陣迄追込ハせでと申遣候得共返し不申退候處 時枝方より久野次右衛門・

曾我部五右衛門兩人無念に存候哉 大友旗本を目懸馳入居敷候敵共ニ立向ニ騎を討取兩人共

ニ討死に仕候 其余ノ中津勢は惣敗軍ニ成最前ノ備場をも打過逃退申候

康之初杵築勢ハ猶踏留り相戦居候處 敵早味方ノ後ニ廻り人数散乱可仕躰ニ付 康之無是非

存 既ニ馬を進敵中エ乗入(れ)むと仕 馬を廻可仕ト仕候得共餘り武勢ニ付 中間ノ次郎

三郎・甚助ト申者共左右ノ轡ニすかり離し不申候 近藤弥十郎も側をはなれ不申 鍵鎗ハ田

中清三持参居候處坂本三郎右衛門馬を乗立馳付参り直ニ供仕候

折節黒系威ノ鎧ニ唐冠ノ冑を着面頬仕候武者一騎馳参り 康之を呼懸候得共 身を鎧候得ハ

見知不申候ニ付 供ノ者共誰人ニて候哉と声々ニ問申候得ハ井上九郎右衛門ト名乗 かゝる

も引も大将ノ心得なり不似合深入沙汰ノ限ニ候急き打入被申候へ 如水頓て是エ着候半と

申捨味方ノ陣ニ引入申候

康之より四郎右衛門ハ如何ト尋申候得ハ 近藤弥十郎疾く被引候由答候ニ付 不及是非実相

寺山を目当ニ仕引申候 道にて左ノ向ニ人数相見候ニ付 坂本三郎右衛門エ尋候へハ 中津

勢ハ右ニ敗軍仕候間大友勢にて可有之由申候 何れも歩武者にて候へハ三郎右衛門申候通ニ

て可有之ト申候 是ハ宗像掃部・吉弘加兵衛等百五十斗 康之最初ニ残置申候実相寺山ノ昇

を見懸本陣と存進寄申候 此者共トハ存知不申間一町程隔実相寺山ノ麓エ着候得ハ 河喜多

藤平御迎ニ参候と申出迎候 又足輕ノ内より鉄炮を持来向ノ敵ニ放懸可申とニ放打候て 何

れも敵を打倒候を馬を駈見届 見事ニ打候由褒美仕 直ニ召連実相寺山エ打上り候へハ 有

吉四郎右衛門・魚住市正等ノ宮津勢居候所エ馬を寄せ 四郎右衛門エ下立候様ニと申 自身

も馬より下り爰こそ我墓所と誓言を立申候得ハ 四郎右衛門も尤と申候ニ はや下津半左衛

門馬を乗下し 則 下立鎗を合敵を突倒候得共 大勢にて引包候ニ付 馬ニ乗鎗を横へ輪を

二三遍かけ透間を見合乗抜申候 退口ニおしかへし鎗合申候とハ此事にて 夜討ノ時ノ鎗よ

りも自儘ニ仕候由 康之又々ハ山八分目程下候得ハ 吉弘・宗像手より鉄炮を雨ノ如く足下

ニ放懸申候 魚住市正進出 康之・四郎右衛門エ對し 御兩人ハ大将にてハ無御座候哉

敵ノ望所エ御陣を被居雜人ノ矢先ニ御懸り候半事口惜候 某御楯ニ立候ト先ニ立申候 杉崎

作左衛門も御橋ニ參候と申矢面ニ塞り申候 康之も左程ニハ有之間敷ト存知候ハスと申元ノ所エ陣を居候へは 魚住市正組ノ御鉄砲并ニ康之鉄砲等を前ニ備隙なく鉄砲を打せ申候内山下を笹ノ丸ノ黒しなへを指候武者一騎乗たて馳参り 打ち居候侍四五人其外歩ノ者共何れも康之指物〔黒塗ノ天突〕を目当ニ駈参候得ハ 味方ノ陣次第ニ厚く相成申候 其上初より昇を建置候へハ 敵方よりハ多人数と心得候哉 吉弘・宗像深入仕候得共統候勢も無之前後を見合居躰ノ處 井上九郎右衛門・野村市右衛門備ノ内より時枝手敗軍仕候を見受逃武者ニ逢 様子を問候處 久野次右衛門馬を入討死仕候由申候ニ付 野村市右衛門為ニハ小鬘ノ続ニ付 是非一弔合戦仕候半と人数を押し申候 康之陣取候山下ニ古畠ノ土手三十間斗有之候 此陰二十四五騎駈参下立候へハ 吉弘・宗像ハ能相手と心得 間壹町程より急ぎ土手際ニ近付鬨声を揚一烟蹴立突懸り申候 野村市右衛門手ノ大勢一度ニ着互ニ相戦 吉弘方勝軍と見へ候處 又井上九郎右衛門手より六七騎馳参古畠ニ乗上各下立横槍を入申候 康之も下知を加鬨を發し懸申候ニ付 大友方被突立吉弘加兵衛討死仕・宗像掃部深手を負申候 康之陣取ノ前ニ魚住市正組ノ御鉄砲并康之鉄砲も一列ニ備見下し候て敵を打立申候處 手負・討 死多^{おおく}大友方敗軍仕候 中津勢も戦ひ^{つかれ}芳候故一町斗追討四五人討取引入申候 杵築勢ハ猶又実相寺山ニ引揚申候 今日^{うま}午刻より酉中刻迄懸引三度ノ軍ニて御座候 左候て康之陣を堅

め候へハ雨降出申候

夜ニ入酉ノ下刻康之儀ハ如水軒よりノ使者岡田三四郎（後黒田監物於有馬戦死）エ対面仕候
其席ニ四郎右衛門・市正兩人も參會仕候處 諸肌拔候武者一人刀を拔走參候 四郎右衛門見
之刀を取立上候得ハ 田中清三薙刀ノ鞘をはつし康之エ渡何れも走出申候 清三八刀を拔右
ノ者ニ立向 名乗候へと申候得共息はつミ後へさかり候 四郎右衛門切候半と仕候へハ跡下
りノ所にて 右ノ者すさり候故刀届兼間遠ニ相成申候 清三は上手より走懸り名乗候へと責
候得ハ弥藏と申候 四郎右衛門何者ぞと問候へは康之薙刀持ノ由答候ニ付 康之携居候長刀
ハ清三請取陣元ノ所ニ返申候

然處雨も次第ニ止ミ如水軒も御着陣 翌十四日より人数を被分 敵を押首実檢御座候上 別
府村ノ前ノ岸ニ□首 平首を二段ニ被擧候 弥義統を可被賣殺旨候處 如水軒ノ年寄母里太
兵衛ハ義統ノ妹婿ニ付被頼之如水軒ノ陣エ降參ニ付 太兵衛エ御預 同十五日中津エ御送候
一最初於大坂表石田三成等叛逆ノ様子 七月十七日（慶長五年）豊前中津エ相聞候由にて 如
水軒より其段杵築エ被仰越 折節竹中伊豆守重信殿も中津ニ參向ニ付関東ノ御味方を被勤加
藤主計頭殿へも以飛札被仰談 先中津より出船富来・安岐両城を海上より被見計 杵築エ御
越城ノ要害を被見繕松井康之等エ御密談有之中津エ御引取

九月九日御出軍ニ被定候處大友氏下向ノ由ニ付 使者を以関東ノ御味方を被勸候得共、両端を被踏候趣ニテ 九月九日使者持帰候書状御出陣ノ途中ニテ相違 伊豆守殿子息竹中采女重次殿を人質ニ御受取伊豆守殿ハ病中ニテ人数迄を被置 大坂方エ手切として富米城工被押詰候内 大友勢杵築城夜討ノ趣康之等より注進ノ飛札相達候ニ付 先井上九郎右衛門等杵築工被差越 同十二日安岐工陣を被置候處城兵討出合戦有之 熊谷方敗軍ニ付直ニ石垣原工御着陣有之候得共 十三日ノ合戦相済候以後ニテ 大友氏降参ニ付中津工被送遣 夫より安岐・富来両城を被攻詰留守居降参仕候

中川修理太夫殿ハ初大坂方ニテ其後両端を被抱候へ共 大友方敗軍其上関東御勝利ノ趣相聞候ニ付 其ノ罪を為可被補太田飛驒守居城曰杵を被攻圍候處 太田父子も如水軒工降参仕候同国府内ノ城主早川主馬頭長敏も大坂ニテ御座候處 留守居早川内右衛門ハ最初より其子を入質ニ出し如水軒工従ひ人数をも出し申候 豊後佐伯城主毛利民部太輔高政殿も大坂方ニ付是又如水軒より人数を被差越領内両所ノ城御受取 豊前小倉城主森老岐守勝信留守も人質を差出申候 左候て加藤家工被牒合直ニ筑後工御討入 鍋嶋加賀守直茂殿を御味方ニ被招柳川城下工押寄附城御申付加賀守殿を以被押置 加藤家両旗ニテ薩摩工御出軍ノ趣ニ御座候康之儀ハ於上方関原御合戦相済 三斎様小野木縫殿助居城福智山を為被成御攻丹波工御出軍

ノ趣等追々承知仕候ニ付 杵築表ノ儀ハ有吉四郎右衛門等エ申談置 如水軒エ得御意候て
十月八日頃杵築出船早々罷上候筈ニ相極 今度於立石表康之初戦功ノ趣如水軒より家康公エ
言上ノ御状写をも御添并九州衆銘々ノ主意十ヶ条々覺書御渡被成候

右ノ通ニて康之儀十月十一日大坂エ着直ニ登城仕候處 於西御丸奉謁家康公九州表ノ様子如
水軒より条数ノ趣等委細言上仕候處被遊御感 関原表御合戦ノ次第をも被遊上意 退出仕候
節猶又小勢ニて殊ニ敵地ニ罷在さぞ始終心遣仕かなと思食候

福智山ノ儀も本多佐渡守殿山岡道阿弥を以て被遊御扱候ニ付 最早無事ニ可相済候間 国ニ
てゆるゆる甘候へと重畳御懇ノ蒙上意申候

同十三日丹波福智山エ着仕候處 小野木縫殿助下城仕松井新太郎興長城受取相済居候ニ付
直ニ田辺エ罷越夫より松倉エ帰城仕候 (文責 入江)

註 慶長五年の一件については、『松井家譜』記載の「豊後杵築立石合戦のこと」と『立石一
件』(熊本大学付属図書館)と内容は一致するが、双方に多少の加除がある。ここに記載す
るのは『家譜』を基にして双方を補完して修正したものである。なお、「立石一件」につい
ては「別府史談」七号に佐藤暁氏の解説文が記載されているので参照していただきたい。

(キツキについては、『一件』には木付、『家譜』には杵築と記されいている。)